誠実に、公正に行なうことです。人間が、神的な律法にしたがうことであるからと誠実で公正に行なうとき、この起源が彼の生活に内在します。

この生活は困難ではありません。しかし、仁愛の生活から切り離された敬虔な生活は困難です。しかもその生活は、天界へ導かれると信じれば信じるほど、それだけ天界から引き離されます。[*2]

＊2　仁愛の生活のない敬虔な生活は何も有効ではない、しかし、仁愛とともに、すべてのものに益する(八二五二、八二五三番)。
隣人に対する仁愛は、すべての働きとすべての職務の中で、善・公正・正義を行なうことである(八一二〇～八一二二番)。
隣人に対する仁愛は、人間が考え、意志し、行なうすべてと個々のものに広がっている(八一二四番)。
仁愛の生活は主の戒めにしたがう生活である(三二四九番)。
主の戒めにしたがって生きることは、主を愛することである(一〇一四三、一〇一五三、一〇三一〇、一〇五七八、一〇六四五番)。
本物の仁愛は、内的な情愛からのものであり、ここからの快さのものであるので、功績的ではない(二三七一、二三八〇、二四〇〇、三八一六、三八八七、六三八八～六三九三番)。
人間は、彼の仁愛の生活が世の中でどのようであったかによって、死後、そのような生活を続ける(八二五六番)。
天界の至福は主から仁愛の生活の中に流入する(二三六三番)。
だれも、ただ善を考えることだけによって天界に入れられない、しかし、同時に善を意志し、行なうことによって入れられる(二四〇一、三四五九番)。
善を行なうことが、善を意志し、善を考えることと結合しないなら、救いはなく、内なる人は外なる人と結合もしない(三九八七番)。

地獄

56　主は地獄を支配されている

五三六　これまで、天界について述べたどこでも(特に、**二**～**六**番で)、主は天界の神であられること、したがって天界のすべての統治は主のものであることを示しました――また、地獄に対する天界の関係、天界に対する地獄の関係は、二つの対立するものの間で、相互にそれ自体に反して働くもののようであり、その作用と反作用から結果として均衡が生じるので、すべてのものはその均衡の中で存続し、それゆえ、すべてと個々のものが均衡の中に保たれるために、一方を支配する者はまたもう一方も支配することが必要です。なぜなら、もし同一の主が地獄からの攻撃を制限し、そこの狂気を抑制しないなら、均衡は失われ、均衡とともに全体も滅びるからです。

五三七　しかし、ここで最初に均衡について述べておきます。

二つのものが相互に反して働き、一方が働きかけ、駆りたてれば駆りたてるほど、それだけもう一方が反応し、抵抗するとき、どちらの側にも等しい内在的な力があるので、どちらの側にも何も力がなく、その時、どちらの側も第三のものによって自由に働きかけられることがよく知られています。なぜなら、同等の対立から二つのものに何も力がない時、第三のものの力が、何も対立するものがないかのように、すべてのものに容易に働

きかけるからです。

［2］このような均衡が天界と地獄の間にあります。一方の力がもう一方の力と同等な強さの身体をもつふたりが闘うようなときの均衡ではなくて、霊的な均衡です。すなわち、真理に対する虚偽、善に対する悪の均衡です。地獄からは絶えず悪からの虚偽が吹き込み、天界からは絶えず善からの真理が吹き込んでいます。

［3］人間が自由に、考え、意志するようにしているものは、この霊的な均衡です――なぜなら、人間が考え、意志するものは何でも、悪とそこからの虚偽に関係するか、または善とそこからの真理に関係するからです。したがって、その均衡の中にいるとき、自由に、地獄からの悪とそこからの虚偽が入るのを許すかまたは受け入れます、あるいは天界からの善とそこからの真理が入るのを許すかまたは受け入れます。

主は、天界と同じく地獄を、二つとも支配されるので、それぞれの人間はこの均衡の中に保たれます。

けれども、神的力により人間から悪と虚偽が取り除かれ、善と真理がもたらされないで、なぜ、人間が均衡によってこの自由の中に保たれるのかは、このあとの章の中で述べます。

五三八　何度か、私は地獄から流れ出る悪からの虚偽のスフェアを知覚することが与えられました――それはすべての善と真理を滅ぼそうとし、それができないことの怒りと激怒のようなものに結合したずっと続く努力（コナトゥス）のようでした。特に、主の神性を絶滅し、破壊する努力（コナトゥス）でしたが、このことはその方からすべての善と真理があるからです。

けれども、天界から善からの真理のスフェアが知覚され、ここから均衡がありました。

この天界から、スフェアは主おひとりからのものであると知覚されましたが、それでも天界の中の天使からのように見えました――主おひとりからであり、天使からでないことは、天界のそれぞれ天使は、善と真理が何ら自分自身からのものではなく、すべてのものは主からであることを認めているからです。

五三九　霊界のすべての力は善からの真理のものであり、決して悪からの虚偽のものではありません。

すべての力は善からの真理のものであることは、天界の中の神性そのものが神的善と神的真理であり、すべての力が神性にあるからです。

決して悪からの虚偽のものではないことは、すべての力は善からの真理のものであり、悪からの虚偽の中に善からの真理のものは何もないからです。

ここから、すべての力は天界にあって、地獄には決してありません。天界のだれもが善からの真理の中にいて、地獄のだれもが悪からの虚偽の中にいるからです――なぜなら、だれも、善からの真理の中にいないうちに、天界に入ることは許されず、悪からの虚偽の中にいないうちに、地獄に投げ込まれこともないからです（このようであることは、死後の人間の第一、第二、第三の状態が述べられている章の**四九一**～**五二〇**番――すべての力は善からの真理のものであることは、天界の天使の力が述べられている章の**二二八**～**二三三**番参照）。

五四〇　それでこのことが天界と地獄の間の均衡です。

霊たちの世界の中にいる者は均衡の中にいます、なぜなら、霊たちの世界は天界と地獄の真ん中にあるからです。そしてここから、世のすべての人間もまた似た均衡の中に保たれています。なぜなら、世の人間は主により霊たちの世界にいる霊を通して支配されているからであり、そのことは、あとの章の中で述べます。

主が、天界も地獄も二つとも支配し、そして二つとも統制されないなら、このような均衡は存在することができません。そうでなければ、悪からの虚偽が満ちあふれ、天界の最も低いところにいる善良で単純な者がその影響を受け、天使よりも容易にゆがめられてしまい、このように均衡は失われ、均衡とともに人間のもとの自由も失われます。

五四一　地獄は、天界と同様に社会に分かれ、そしてまた天界にある社会と同数の多くの社会に分かれています。なぜなら、天界のそれぞれの社会はそれと正反対の社会を地獄の中にもち、このことは均衡のためであるからです。

しかし、地獄の社会は、天界の社会が善とそこからの真理にしたがって区別されているので、悪とそこからの虚偽にしたがって区別されています。

それぞれの善に正反対の悪があり、それぞれの真理に正反対の虚偽があることは、あるものはその正反対のものとの関係なしに存在しないこと、また正反対のものから、どんなものであるか、またその中の段階が知られること、またここからすべての知覚と感覚があることから知ることができます。

それゆえ、主は、天界のすべての社会がその正反対のものを地獄の社会の中にもち、それらの間に均衡があるように、常に配慮されています。

五四二　地獄は、天界と同数の多くの社会に分かれているので、それゆえまた、天界と同数の多くの地獄があります。なぜなら、天界のそれぞれの社会は、小さい形の天界であり（前の**五一**～**五八**番参照）、このように地獄のそれぞれの社会は小さい形の地獄であるからです。

全般的に三種類の天界があるので、それゆえ、全般的に三種類の地獄があります。最内部または第三の天界に対立している最も下の地獄、中間または第二の天界に対立している中間の地獄、そして最外部または第一の天界に対立している上部の地獄です。

五四三　けれども、地獄は主によりどのように支配されているかもまた簡潔に述べます。

地獄は一般に天界からの神的善と神的真理の全般的な流れ込みによって支配され、それによって地獄から流れ出る全般的なコナトゥス（努力）が抑制され、制限されています。また、それぞれの天界から、またはそれぞれの天界の社会からの特別な流れ込みにもよっています。

地獄は個別的に天使によって支配され、その天使に、地獄を視察し、そこの狂気と騒動を抑制することが与えられています。時々、天使は地獄に送られることもあり、そこに臨在することで狂気と騒動を抑制します。

けれども、全般的に地獄の中にいるすべての者は、恐怖によって支配されています。ある者は、世から植え付けられ、今なお定着している恐怖によっています。しかし、これらの恐怖は十分ではなく、また少しずつ去ってしまうので、罰の恐怖によって支配され、そのことによって特に悪を行なうことから抑制されます。

そこの罰は多種多様であり、悪にしたがって穏やかなものや重いものがあります。

多くの場合、ずるさと策略でまさる悪意ある者が彼らの上に置かれ、罰とここからの恐怖によって、従順と隷属を保つことができます――これらの統治者は自分自身に規定された限界をあえて超えることをしません。

地獄にいる者の暴力と激怒を制限する唯一の手段は罰の恐怖であって、他の手段は存在しないことを知る

べきです。

五四四　世ではこれまで、「地獄を支配するある悪魔がいて、その悪魔は光の天使として創造された、しかし、その後、反逆を行ない、自分の仲間とともに投げ落とされた」と信じられてきました。

このように信じられたのは、みことばの中に、悪魔とサタン、それとまた魔王〔明けの明星、イザヤ一四・一二参照〕の名前が挙げられ、みことばが文字どおりの意味にしたがって理解されたからです。それでも、「悪魔」と「サタン」によって、そこでは地獄が意味されます。「悪魔」によって、背後にあって、悪の悪鬼と呼ばれる最悪の者の地獄が意味されます。また「サタン」によって、前面にあって、悪い霊と呼ばれるそれほど悪質でない者の地獄が意味されます。また「魔王」によって、自分の支配を天界にまで伸ばす者であるバベルまたはバビロニア(バビロン)からの者が意味されます。

地獄を服従させる悪魔がいないことは、地獄にいるすべての者が天界の中にいるすべての者のように、人類からであること(**三一一**～**三一七**番参照)、またそこのだれもが、世で神性に反対したような悪魔であり、創造の始めからこの時代まで無数にいることからもまた明らかです(これらについては前の**三一一**、**三一二**番参照)。

57　主はだれも地獄へ投げ込まれない、霊が自分自身を投げ込む

五四五　〝神は人間から顔を背け、ご自分から人間を退け、地獄に投げ込み、悪のために人間に対して怒る〟という見解を強く持つ者がいます。さらに超えて、〝神は人間を罰し、人間に悪を行なう〟という見解を持つ者もいます。みことばの文字どおりの意味から、そこに似たことが言われていることから、この見解を確信しています。

みことばの文字どおりの意味を解説する霊的な意味は、まったく別のことを言っていて、みことばの霊的な意味からのものである教会の本物の教えは、別のことを教えていることを知りません。すなわち、神はだれからも顔を背けず、ご自分から人間を退けず、ある者を地獄へ投げ込まず、怒ってもおられないことです。[*1]

さらにまた、みことばを読むとき、心を照らされるだれもが、神は善そのもの、愛そのもの、慈悲そのもの

---

*1　みことばの中で怒りと憤りは主に帰せられている、しかし、人間のもとにある。罰せられ、断罪されるとき、人間にはこのように見えるので、このように言われている(五七九八、六九九七、八二八四、八四八三、八八七五、九三〇六、一〇四三一番)。
悪もまた主に帰せられている、そのときそれでも主からは善以外の何ものもない(二四四七、六〇七一、六九九一、六九九七、七五三三、七六三二、七六七九、七九二六、八二二七、八二二八、八六三二、九三〇六番)。
なぜ、このようにみことばの中に言われているのか(六〇七一、六九九一、六九九七、七六三二、七六四三、七六七九、七七一〇、七九二六、八二八二、九〇一〇、九一二八番)。
主は純粋な慈悲と柔和である(六九九七、八八七五番)。

であられることから、このことを知覚し、善そのものであられる方はだれかに悪を行なうことができないこと、愛そのものと慈悲そのものであられる方はご自分から人間を退けることができないことを知覚します。慈悲と愛の本質そのものに反し、そのように神性そのものに反するからです。

それゆえ、照らされた心から考える者は、みことばを読むとき、神は決してご自分を人間から背けられないこと、ご自分を人間から背けられないので、善・愛・慈悲から人間を扱われること、すなわち、人間の善を望み、愛し、哀れみを示されることをはっきりと知覚します。

ここからもまた、このようなことが言われているみことばの文字どおりの意味は、その中に霊的な意味がしまい込まれており、その文字どおりの意味は人間の把握に適し、最初の段階の全般的な観念にしたがっているものであって、霊的な意味にしたがって解釈されなければならないことを知っています。

五四六　照らされている者は、さらに進んで、善と悪は二つの正反対のもの、天界と地獄のように正反対のものであり、すべての善は天界から、すべての悪は地獄からであること、また主の神性が天界をつくるので(**七～一二**番)、主からは善しか人間のもとに流入しないこと、地獄からは悪しか流入しないこと、このように主は人間を絶えず悪から引き出し、善へ導かれ、地獄は人間を絶えず悪へ導き入れることを知っています。

もし人間が二つのものの間にいないなら、人間に何らかの思考も、何らかの意志も、まして何らかの自由も、何らかの選択もありません。これらすべてのものは善と悪の間の均衡から人間にあるからです――それゆえ、もし主がご自分を背け、人間に悪だけを残されるなら、もはや人間は人間のままではいられません。

これらから、主は善とともに人間のもとに、善い者と等しく悪い者のもとに流入されるとき、そこには悪

い人間を絶えず悪から引き出し、善い人間を絶えず善へ導かれるという相違があります。このような相違は、人間は容器であるので、人間のもとにあることが明らかです。

五四七　これらから、人間は地獄から悪を行ない、天界から善を行なうことを明らかにすることができます――しかし、人間はだれも自分自身から行なうと信じているので、それゆえ、行なう悪は、自分自身のものであるかのように彼に付着しています。ここから、悪の原因は人間自身にあって、決して主にあるのではありません。

人間にある悪は人間のもとにある地獄です。なぜなら、悪と言っても、あるいは地獄と言っても、同じことであるからです。

さて、悪の原因は人間自身にあるので、それゆえ、さらにまた彼は自分自身を地獄の中に引き入れ、それは主ではありません。人間が自分自身の悪の中にいることを欲さなければ、その悪を愛さなければ、それだけ、主は、人間を地獄から解放しようとされ、人間を地獄に引き入れることはされません。

人間の意志と愛のすべては、死後、彼のもとに残ります(**四七〇～四八四**番)。世で悪を欲して、愛する者は、同じ悪を来世で欲し、愛して、その時、もはやこのことから引き出されないことを自分自身に許します――ここから、悪の中にいる人間は、地獄に結びつけられていて、また実際に自分の霊に関してはそこにいて、そして死後、自分自身の悪があるところ以外の居場所を決して願いません――それゆえ、死後、人間はまさに自分自身を地獄に投げ込むのであって、主ではあられません。

五四八　このことがどのように生じるか、なおまた述べます。

人間が来世に入る時、最初、天使により迎えられ、天使は彼にすべての親切を行ない、そしてまた彼と、主・天界・天使の生活について話し、彼に真理と善を教えます――しかし、その時は霊となっている人間が、世で確かに知り、しかし、心で否定するかまたは軽蔑したようなものであったなら、その時、いくらか話した後、その者は天使から去ることを願い、そのこともまた求めます。そのことに天使が気づくとき、天使は彼を残して去ります。

彼は、他の者といくらか交わった後、ついに、自分自身の悪と似た悪の中にいる者と仲間となります（前の**四四五～四五二**番参照）――そのことが起こるとき、主から自分自身をそらし、世ですでに結合していた地獄へ顔を向けます。そこには、似た悪の愛の中にいる者がいます。

これらから、主はすべての霊を、天使によって、そしてまた天界からの流入によって、ご自分に引き寄せられることが明らかです。しかし、悪の中にいる霊は、完全に抵抗し、いわば綱によるかのように、主から自分自身を引き離し、自分自身の悪により、このように地獄により引かれます。そして引かれ、悪の愛により従うことを欲するので、自由から自分自身を地獄の中へ投げ込むことが明らかです。

このようであることは、地獄についてもっている観念から、世では信じられることができません。それどころか、来世でも、地獄の外にいる者の目の前でなければ見られません、けれども、自分自身をそこへ投げ込む者は見ません――というのも、自発的に自分自身から入るからです。また、悪への強烈な愛から入る者は、頭を下に、足を上にして、仰向けになって投げ入れられるように見えます。

この外観から、地獄に投げ込まれるのは神的な力によるかのように見られます（これらの事柄について多くのものが前の**五七四**番に見られます）。

これらから今や、主はだれも地獄へ投げ込まれず、それぞれの者が自分自身を、世で生きるときだけでなく、死後、霊の間に来たときもまた投げ込むことを知ることができます。

五四九　主が、ご自分の神的本質である善・愛・慈悲から、すべての人間に同じように働きかけることのできない理由は、悪とそこからの虚偽が立ちふさがり、その方の神的流入を弱めるだけでなく、退けもするからです。

悪とそこからの虚偽は、太陽と人間の目の中間に入り込み、光の照らしと明るさを取り去る黒い雲のようです。それでも太陽は立ちふさがる雲を絶えず散らそうと努めています。なぜなら、その雲の背後に存在し、活動していて、その間、はっきりしない光を人間の目の中へ、いろいろな回り道によって、送り込むからです。

霊界も同様です――そこの太陽は主と神的愛であり（**一一六～一四〇**番）、そこの光は神的真理です（**一一六～一四〇**番）。そこの黒い雲は悪からの虚偽であり、そこの目は理解力です。

そこではだれかが悪からの虚偽の中にいればいるほど、それだけ彼のまわりに、悪の程度にしたがって、このような黒くて濃い雲があります。

この比較から、主は絶え間なくそれぞれの者のもとに臨在されています、しかし、異なって受け入れられていることを知ることができます。

五五〇　悪霊は霊たちの世界でひどく罰せられますが、それは罰によって悪の実行を抑制するためです。このこともまた主からのように見えます。

しかしそれでも、そこの罰は、決して主からではなく、悪そのものから存在します。なぜなら、悪にはそれ自体の罰が分離されることができないように結合しているからです――地獄の連中は悪を行なうこと、特に、罰を加え、苦しめること以上に願い、愛することは何もなく、また主により守られていない者のだれにも、悪を行ない、罰を加えるからです。それゆえ、だれかが悪の心から悪を行なう時、そのことによって主からのすべての保護を退けるので、このような悪を行なう地獄の霊がその者に突進し、罰します。

このことは、世の悪とその罰から、ある程度、説明されることができます。

そこの法律はそれぞれの悪に罰を規定しているので、そこでもまた結びついているからです。それゆえ、悪へ突き進む者は、悪の罰へもまた突き進みます。

ただ、世の悪は隠されることができます、けれども、来世では隠されないという相違があります。

これらから、主は決して悪を行なわれないこと、またこのことは世と同様であることを明らかにすることができます。すなわち、王も、裁判官も、法律も、罪が罰せられる原因ではありません、悪を行なう者の悪の原因ではないからです。

58　地獄の中にいるすべての者は、自己愛と世俗愛からの悪と虚偽の中にいる

五五一　地獄の中にいる者はすべて、悪とここからの虚偽の中にいます、そして、そこのだれも、悪の中にいるのと同時に真理の中にいることはありません。

世の悪い者の大部分は、教会の真理である霊的な真理を知っています。それらを幼児期から学び、その後、説教から、みことばを読むことから、そしてその後、それらから話してきたからです。また、ある者は、心からのキリスト教徒であることを他の者が信じるように装いました。真理からの情愛の見せかけをもって話すこと、また霊的な信仰からかのように誠実に行動することを知ったからです――しかし、その者は、自分自身の中でそれらに反したことを考え、市民の法律のためだけでなく、名声・名誉・利益のためという自分の考えにしたがって、悪の実行を慎みましたが、そのすべての者は、心で悪であり、霊に関してではなく、身体に関してだけ、真理と善に属すものの中にいます。それゆえ、来世で彼らの外なるものが取り除かれるとき、まったく悪と虚偽の中にあって、何らかの真理と善に属すものの中になかった彼らの霊に属す内なるものがあらわにされます。それで、真理と善は、彼の記憶知として記憶の中だけにあり、ここからそれらを取り出し、話すときに、霊的な愛と信仰からのように善を偽り装ったことが明らかです。

このような者は、自分の内なるものの中へ、その結果、自分の悪の中へ入れられる時、もはや真理を話すことができないで、悪から話すので、虚偽だけを話します。なぜなら、悪から真理を話すことは不可能であり、その時、霊は自分自身の悪と悪から発出する虚偽以外の何ものでもないからです。

悪霊はそれぞれ、地獄に投げ込まれる前に、この状態にされます(前の**四九九**〜**五一二**番参照)。このことは、「真理と善に関する荒廃」と言われます。[*1] 荒廃とは、内なるものの中へ、このように霊のプロプリウム(固有のもの)の中へ、すなわち、霊そのものの中へ入れられること以外の何ものでもありません(これらについてもまた前の**四二五**番参照)。

五五二　死後、人間がこのようなものである時、もはや最初の状態の中にいたような霊人間〔人間的な霊〕ではなく(そのことについては前の**四九一**〜**四九八**番)、真に霊です。なぜなら、真に霊である者は、彼の心(animus)のものである内なるものに対応する顔と身体をしていて、それらは彼の内なるものの型または像である外なる形であるからです。

前に述べた第一と第二の状態を終わったあとの霊はこのようなものです――それゆえ、その時、目で眺められるとき、顔からだけでなく、身体からも、そしてその後、話し方と振る舞いから、直ちに、どのようなものであるか認められます。またその時、自分自身の中にいるので、〔自分と〕似た者がいるところ以外の他のところにいることはできません。

[2]霊界では情愛とそこからの思考は、すべての点で伝達するので、それゆえ、霊は自分自身と似た者のところへ、自分の情愛とその快さから、いわば自分自身から運ばれます。むしろ自分自身をそこへ向けるのです。なぜなら、こうして自分自身の生活を吸い込む、すなわち、自由に自分の呼吸をするからです、しかし、他のところへ向けるとき、そうではありません。

霊界では、他の者との伝達は顔の方向転換にしたがって起こること、またそれぞれの者の面前に常に自分

の愛と似たものの中にいる者がいること、またこのことは身体をどの方向に変えてもそうなっていることを知らなくてはなりません(前の**一五一**番参照)。

[3]ここから、地獄のすべての霊は、主を後ろにして、世の太陽の代わりに、また月の代わりにそこにある暗黒のものと暗やみのものへと向きを変えます。しかし、天界のすべての天使は、天界の太陽として、天界の月としての主へ自分を向けています(前の**一二三**、**一四三**、**一四四**、**一五一**番参照)。

それで、これらから、地獄の中にいるすべての者は、悪とそこからの虚偽の中にいること、また、自分自身の愛へ向っていることが明らかです。

五五三　天界の何らかの光の中で眺められた地獄の中のすべての霊は、それ自身の悪の形で見られます。だれもが自分自身の悪の像であるからです、なぜなら、それぞれの者のもとで内的なものと外的なものは一つとして働き、内的なものは、顔・身体・話し方・振る舞いである外的なものの中にそれ自体が見られるように示すからです。このように、どんなものであるか、目で認められます。

＊1　悪い者は、地獄へ投げ入れられる前に真理と善に関して荒廃させられ、それらを取り去られて、自分自身から地獄の中へ運ばれる(六九七七、七〇三九、七七九五、八二一〇、八二三二、九三三〇番)。
主は彼らを荒廃されない、しかし、彼らが自分自身を荒廃させる(七六四三、七九二六番)。
すべての悪はそれ自体の中に虚偽をもつ、それゆえ、悪の中にいる者は、虚偽の中にもまたいる、それでもそのことを知らない者がいる(七五七七、八〇九四番)。
悪の中にいる者は、自分自身から考えるとき、虚偽しか考えることができない(七四三七番)。
地獄の中にいるすべての者は悪からの虚偽を話す(一六九五、七三五一、七三五二、七三五七、七三九二、七六八九番)。

全般的に、他の者への軽蔑の形、自分を尊ばない者に対する脅迫の形をしています。いろいろな種類の憎しみの形、いろいろな種類の復讐の形をしています。内的なものからの狂暴さと残酷さが、それらを通して透かして見えます――しかし、他の者が彼らをほめ、尊び、礼拝するとき、彼らは、顔をしかめますが、快さからうれしそうに見えます。

[2]それらの形のすべてがどのように見えるかを、手短に述べることはできません、あるものは他のものに似ていないからです。ただ似た悪の中に、またそこから地獄の似た社会の中にいる者には、共通の類似があり、その共通の類似する面から〔いろいろなものが〕派生してくるように、そこの個々の顔には、ある類似したものが見られます。

全般的に、彼らの顔は恐ろしいものであり、死体のようにいのちを欠いています。ある者の顔は黒く、ある者の顔は、たいまつの火に似ています。ある者の顔には、吹き出物・静脈瘤・醜い潰瘍があります。顔の見えない者も多くて、そこには代わりに、髪の毛または骨のようなものが見えます。ある者は、歯だけが現われます。彼らの身体もまた怪物のようです。その話し方は、怒りまたは憎しみまたは復讐からかのようです、なぜなら、だれもが自分自身の虚偽から話し、自分自身の悪から声を出すからです――一言でいえば、すべての者は自分の地獄の像となっています。

[3]地獄そのものが全般的にどんな形であるか、〔私に〕見ることは与えられていません。次のことだけが言われました。全天界は一つの統一体としてひとりの人間を表わすように(**五九～六七**番)、全地獄は一つの統一体としてひとりの悪魔を表わすこと、また、ひとりの悪魔の像として示されることができることです(前の**五四四**番参照)。

しかし、特定的に地獄が、すなわち地獄の社会が、どんな形であるかは、しばしば見ることが与えられました。なぜなら、地獄の門と呼ばれる開口部に、多くの場合、怪物が見られ、それがたいてい、内部にいる者の形を表象しているからです――同時に、そこにいる者の狂暴さもまた、恐ろしいものとぞっとするものによって表象されますが、それらを述べることは省略します。

[4]しかし、地獄の霊は、天界の光(ルークス)の中でこのようなものに見えるのであって、自分たちの間では人間のように見えることを知っておくべきです。天使の前で見られるようには、自分たちの間で醜くないのは、このこともまた主の慈悲からです――しかし、それらの外観は欺きです、なぜなら、天界から何らかの光が入るとすぐに、彼らの人間の形は本質的な性質である怪物に変化するからです。その性質についてはすぐ前に述べました。なぜなら、天界の光の中で、すべてのものは本質的に存在するままに見られるからです。

ここからもまた、彼らは天界の光(ルークス)を避け、そして自分自身の光(ルーメン)の中に逃げ込みます。その光(ルーメン)は、炭火からの光のようであり、またあるところでは、燃える硫黄からの光のようです。しかしまた、この光は、そこに天界から何らかの光が流入するとき、暗黒そのものに変わります。

ここから、地獄は暗黒と暗やみの中にある、と言われ、「暗黒と暗やみ」は、地獄の中にあるような悪からの虚偽を意味します。

五五四　地獄の霊の怪物のような形を眺めることから(それらは〔すぐ前に〕述べたように、すべての者は、他の者への軽蔑の形を、自分に敬意を払わず、尊ばない者に対する脅迫の形を、さらに自分に好意をもたない者に反する憎しみと復讐の形をしています)、すべての者は全般的に自己愛と世俗愛の形であることが明らかです。また特定の形で存在する悪は、それら二つの愛から起源を得ています。

天界から私に言われ、また多くの経験から証明もされたことですが、それらの二つの愛、すなわち、自己愛と世俗愛は地獄を支配し、地獄をつくっています。そして、主への愛と隣人に対する愛は天界を支配し、天界をつくっています。地獄の愛であるそれらの二つの愛は、そして天界の愛であるそれらは二つの愛は、真正面から対立しています。

五五五　最初、私は、自己愛と世俗愛がこのように悪魔的であり、その愛の中にいる者が外見ではこのように怪物であることがどこからなのか、不思議に思いました。世では自己愛についてほとんど考慮せずに、自尊心と呼ばれる外なるものの中での心(animus)の高まりが、これは視覚に見えるので、これだけが自己愛であると信じられています。さらに自己愛は、このように現われないので、世では活力の火であると信じられています。そこから人間は職を求めることへ、また役立ちを果たすことへとかきたてられ、その中に名誉と栄光を見ないなら、人間の心は不活発になります。

彼らは、「他の者により、または他の者の心の中で、称賛され、尊敬されないなら、何らかの価値のあること、役立つこと、また注目すべきことを、だれが行なうのか？ また、栄光と名誉のための、結果として自分自身のための、愛の火からでないなら、どこからなのか？」と言います。ここから、本質的に眺められるとき、自己愛は地獄を支配し、人間のもとで地獄をつくる愛であることが世では知られていません。

このようなので、私は、自己愛とは何か、その後、その愛からすべての悪とそこからの虚偽が湧き出ることを最初に述べます。

五五六　自己愛は、ただ自分にだけよいようにと欲し、自分のためでないなら他の者によいように、また決して、教会・祖国、または何らかの人間の社会によいようにとは欲しません。そのようにまた、自分自身の名声・名誉・栄光のためになるときだけ、それらによくしようとします。役立ちを果たすとき、役立ちの中に自分自身の名声・名誉・栄光のためになるものを見つけないなら、心の中で、「何の関係があるのか？ なぜこのことをするのか？ ここから何が私に得られるのか？」と言い、こうしてやめてしまいます。

ここから、自己愛の中にいる者は、教会も、祖国も、社会も、何らかの役立ちも愛さないで、自分自身だけを愛することが明らかです。彼の快さは単に自己愛の快さです。愛からやって来る快さが人間の生活をつくるので、それゆえ、彼の生活は自分自身のための生活です。そして自分自身のための生活は人間のプロプリウム(固有のもの)からの生活であり、本質的に眺められた人間のプロプリウムは悪以外の何ものでもありません。

自分自身を愛する者は、自分自身のものもまた愛します。それらは特定的には彼の子と孫であり、全般的には、自分自身のものと呼ぶ彼と一つとなっているすべてのものです。それらを愛することは、自分自身を愛することでもあります、なぜなら、それらを自分自身の中に、またそれらの中に自分自身があるかのように眺めるからです。

自分自身のものと呼ぶものの中に、彼を称賛し、尊び、礼拝するすべて者も含まれます。

五五七　天界的な愛との比較から、自己愛がどんなものであるか、明らかにすることができます。

天界的な愛は役立ちのために役立ちを、すなわち、善のために善を愛することであり、人間は、教会・祖国・人間の社会・仲間の市民にその役立ちを果たします。すべての役立ちとすべての善は、神からのものであり、

また愛さなければならない隣人であるので、このことは神を愛し、隣人を愛することであるからです。

しかし、自分自身のためにそれらを愛する者は、それらが自分自身に仕えるので、彼はそれらを召使い以上には愛しません――ここからいえることは、自己愛の中にいる者は、教会・祖国・人間の社会・仲間の市民が自分に仕えることを欲し、彼自身がそれらに仕えることを欲しないで、自分をそれらの上に、自分の下にそれらを置くことです。

ここから、ある者が自己愛の中にいればいるほど、それだけ天界から遠ざかります、天界的な愛から遠ざかるからです。

五五八（その1） さらに、ある者が役立ちと善を愛することである天界の愛の中にいて、教会・祖国・人間の社会・仲間の市民のためにそれらの愛を実践するとき、心が快さに満たされていればいるほど、それだけ主により導かれています。その愛は主の中にあり、主からのものであるからです――しかし、ある者が役立ちと善を自分自身のためになし遂げる自己愛の中にいればいるほど、それだけ自分自身により導かれます。自分自身によって導かれれば導かれるほど、それだけ主によって導かれません――ここからもまたいえることは、だれでも自分自身を愛するほど、それだけ自分自身を神性から、こうして天界から遠ざけることです。

自分自身によって導かれることは、自分自身のプロプリウムによって導かれることです。そして、人間のプロプリウムは悪以外の何ものでもありません。なぜなら、その悪は遺伝悪であり、それは主よりも自分自身を、そして天界よりも世を愛するからです。*2

人間は行なう善の中で自分自身に目を向けるたびごとに、それだけ自分のプロプリウムに、このように自分の遺伝悪の中に入れられます。なぜなら、自分自身から善へでなく、善から自分自身へ目を向けるからです。それゆえ、善の中に神的な映像ではなく、自分自身の映像を示します。

このようであることを、私はさらにまた経験によって確信しました。

天界の下の北と西の中間の地域に住んでいる悪い霊がいます。その者は、正直な霊をそのプロプリウムへ、こうしていろいろな種類の悪の中へ引き入れる技術に熟練しています。あからさまな称賛と敬意によって、あるいは善良な霊の情愛をひそかに自分自身へと向けることによって、彼らを自分自身についての思考の中に引き入れます――このことをやり遂げればやり遂げるほど、それだけ正直な霊の顔を天界から背かせ、それだけ彼らの理解力を暗くし、彼らのプロプリウムから悪を呼び出します。

＊2 人間が両親から遺伝により得ているプロプリウムは、執拗な悪以外の何ものでもない（二一〇、二一五、七三一、八七六、九八七、一〇四七、二三〇七、二三〇八、三五一八、三七〇一、三八一二、八四八〇、八五五〇、一〇二八三、一〇二八四、一〇二八六、一〇七三一番）。

人間のプロプリウムは、神よりも自分自身を、天界よりも世を愛することであり、自分自身と比べて隣人を自分のためにならないなら無とし、このように自分自身にだけ行ない、こうして自己愛と世俗愛である（六九四、七三一、四三一七、五六六〇番）。

すべての悪は、主権をもつとき、自己愛と世俗愛から出てくる（一三〇七、一三〇八、一三二一、一五九四、一六九一、三四一三、七二五五、七三七六、七四八八、七四八九、八三一八、九三三五、九三四八、一〇〇三八、一〇七四二番）。

それらは、他の者への軽蔑・敵意・憎しみ・残酷・欺きである（六六六七、七三七〇、七三七四、九三四八、一〇〇三八、一〇七四二番）。

また、これらの悪から、すべての虚偽が湧き出る（一〇四七、一〇二八三、一〇二八四、一〇二八六番）。

五五八（その2）　自己愛は隣人に対する愛と正反対であることは、その二つの愛の起源と本質から知ることができます。

自己愛の中にいる者のもとの隣人愛は、自分自身から始まります。「自分自身が隣人である」とだれもが言うからであり、その者を中心とするかのように、彼から、彼の愛による結合の程度にしたがって減少しながら、彼自身と一つとなっているすべての者へと進みます。その仲間づきあいから外れた者は、無価値と見なし、彼らと、また彼らの悪と対立する者は、どんな種類の賢明な者、あるいは正直な者、誠実または公正な者であっても、敵と見なします。

しかし、隣人に対する霊的な愛は主から始まり、その方を中心とするかように、その方から愛と信仰の性質にしたがって、その方に愛と信仰によって結合しているすべての者へと進みます。[*3]

ここから、人間から始まる隣人愛と主から始まる隣人に対する愛は正反対であることが明らかです。前者は人間のプロプリウムからのものなので悪から発出します。しかし、後者は善から〔発出します〕、〔それは〕善そのものである主からのものであるからです。

さらにまた、人間からまたそのプロプリウムから発出する隣人愛は形体的（物質的）であること、しかし、主から発出する隣人に対する愛は天界的であることも明らかです。

一言でいえば、人間の中にある自己愛は、彼の頭をつくり、天界的な愛は彼の足をつくります。自己愛は天界的な愛の上に立ち、もし自分に仕えないなら、その愛を足で踏みにじります。

ここから、地獄に投げ込まれる者は、あお向けになって、頭を地獄へ向けて下にし、足を天界へ向けて上にして、投げ込まれるように見えます（前の**五四八**番参照）。

五五九　さらにまた、自己愛は次のようなものです。彼らが抑制をゆるめられるなら、すなわち、法律やその罰の恐れ、また名声・名誉・利益・職・いのちを奪われることの恐れである外なる束縛が取り去られるなら、ついには地球上の全地だけでなく、さらにまた全天界を、そして神性そのものまでも支配しようとし、彼に限界または終わりは何もないほどにまでも、突進します。このことは、世では前述の束縛が彼を抑制するので、たとえ世の前に明らかではなくても、自己愛の中にいるそれぞれの者の中に隠されています。

＊3　隣人を愛することが何か知らない者は、それぞれの人間が隣人であり、働きを必要とするそれぞれの者によくしてやらなければならない、と考える（六七一〇四番）。
そしてまた、それぞれの者が隣人であり、このように隣人に対する愛は自分自身から始まる、と信じている（六九三三番）。
自分自身をすべてにまさって愛する者は、そのように自己愛に支配されている者は、隣人に対する愛もまた自分自身から始まっている（六七一〇番）。
しかし、それぞれの者が自分にとってどのように隣人であるか、説明される（六九三三～六九三八番）。
しかし、キリスト教徒であり、すべてにまさって神を愛する者は、隣人に対する愛が主から始まる。主はすべてにまさって愛さなければならないからである（六七〇六、六七一一、六八一九、六八二四番）。
隣人の相違は主からの善の相違と同じだけ多くあり、隣人の状態がどのようなものかにしたがってそれぞれの者に対して相違とともに善を行なわなければならず、これはキリスト教徒の思慮である（六七〇七、六七〇九、六七一一、六八一八番）。
その相違は無数にある。それゆえ、隣人とは何か知っていた古代人は、仁愛の実践を分類し、それらを名前で区別した。ここからいかなる観点から互いに隣人であるか、またどのようにそれぞれの者に思慮をもってよくしてやらなければならないかを知った（二四一七、六六二八、六七〇五、七二五九～七二六二番）。
古代教会の中の教えは隣人に対する仁愛の教えであり、彼らの知恵はそこからであった（二四一七、二三八五、三四一九、三四二〇、四八四四、六六二八番）。

そのようであることは、だれもが、このような抑制や束縛のない、力ある者や王たちに見ています。彼らは、成功するかぎり突進し、属州や国を征服し、際限もなく力と栄光を熱望します。

やはりそのようであることは、今日のバビロンから、さらにはっきりと明らかです。バビロンは支配権を天界に伸ばし、主の神的なすべての力を自分自身に移し、絶えずさらなるものを望んでいます。

このような者は、死後、来世にやって来るとき、神的なものと完全に対立し、天界と対立し、地獄に味方します(小著『最後の審判と滅ぼされたバビロニア』参照)。

五六〇 すべての者が自分自身だけを愛し、他の者は自分と一つとならないかぎり愛さないような者の社会を思い描いてみなさい。あなたに、彼らの愛が略奪者同士の間の愛のようなものでしかないことがわかるでしょう。その者は、一緒に行動するかぎり、互いにキスし、友と呼びます。しかし、一緒に行動しないなら、また彼らの支配権を拒否するなら、突進して、みな殺しにします。

もし、彼らの内的なもの、すなわち、彼らの心が調べられるなら、敵意ある憎しみでいっぱいであり、互いに対立し、すべての公正と誠実を、また神性を心から嘲笑し、無価値なもののように拒絶しているのがわかります。

このことはこのあとで述べられる地獄の中の彼らの社会から、さらに明らかになります。

五六一 自分自身をすべてにまさって愛する者の思考と情愛である内的なものは、自分自身と世へ向けられていて、このように主と天界から背を向けています。

ここから、すべての種類の悪に取りつかれ、神性が流入することができません。神性は流入するとすぐに、

自分自身についての思考に浸され、汚され、そしてまた彼らのプロプリウムからのものである悪を注ぎ込みます。

ここから、これらすべての者は来世で、主から後ろ向きになって暗黒のものを眺めます。それは世の太陽の代わりにそこに存在し、主である天界の太陽と正反対に対立しています(前の一二三番参照)。「暗黒」もまた悪を意味し、「世の太陽」は自己愛を意味します。*4

五六二 自己愛の中にいる者の悪は、全般的に、他の者への軽蔑・ねたみ・自分自身に賛同しないすべての者に対する反目・そこからの敵意・いろいろな種類の憎しみ・復讐・狡猾・欺き・無慈悲、そして残酷です。また宗教の事柄に関しては、神性への軽蔑、そして教会の真理と善である神的なものへの軽蔑だけでなく、それらに対する怒りです。その怒りもまた人間が霊になるとき憎しみに変わります。そしてその時、それらを聞くことに耐えられないだけでなく、神性を認め、礼拝するすべての者に対して憎しみを燃え上がらせます。

私は、世で勢力があり、自分自身を過度に愛した者と話したことがあります。彼は、神性について言われるのを聞くとき、特に主について言われるのを聞くとき、その怒りから、殺意に燃え上がるような、それほどの大きな憎しみをかきたてられました。

彼はまた、自分の愛への抑制がゆるめられるとき、自己愛から絶えず天界を攻撃することができるような

---

*4 「世の太陽」は自己愛を意味する(二四四一番)。
その意味で、「太陽崇拝」によって、天界的な愛と主に対立するものを崇拝することが意味される(二四四一、一〇五八四番)。
「熱くなる太陽」は増大する悪の欲望である(八四八七番)。

悪魔そのものであることを欲しました。

このこともまた、ローマカトリック教からの多くの者が、来世で、主にすべての力があること、そして自分たちに何も力ないことを認めるとき、その者らが熱望することです。

五六三　西の地方の南に向けて、ある霊が私に見られました。その者は、「世で自分たちは高い地位にあり、他の者よりも称賛され、他の者を支配するに値していた」と言いました。

彼らは、天使により内部がどのようなものであるか調べられました。世での自分の役目では、役立ちに目を向けず、自分自身に目を向け、こうして役立ちでは自分自身を優先させたことがわかりました。けれども、その者は他の者の上に置かれること求め、熱烈に要求したので、仕事上、重要な事柄について相談役である者の間にいることが与えられました。しかし、扱われている仕事について何も注意を傾けること、事柄を内面的、本質的に見ることができず、物事をその役立ちから話さないで、プロプリウムから話し、また、えこひいきから意のままに行なうことを望んでいることが認められました。それゆえ、その職務からはずされ、他のところで自分自身で役目を探すように、捨て置かれました。

そこでさらに遠く西の地方に進み、その場所のあちこちで受け入れられましたが、しかし、どこでも、彼らは、「自分自身について、また自分自身からでないなら、何の事柄についても考えていない」と言われました。このように愚鈍であり、単に身体的で感覚的な霊のようなものです――それゆえ、どこへ行っても追放されました。

時を経てから、彼らが窮地に追いやられ、施しを求めているのが見られました。

ここからもまた、自己愛の中にいる者は、どれほどその愛の火から世では賢く語るように見られても、そ

れでもその語ることは単なる記憶からであり、何らかの理性の光からではないことが明らかです。それゆえ、来世で、もはや自然的な記憶の事柄が再現されることが許されないとき、他の者よりもさらに愚鈍であり、またこのことは彼らが神性から分離されているという理由によります。

五六四　支配には二種類あります。一つは隣人に対する愛の支配であり、もう一つは自己愛の支配です。これら二つの支配はその本質で完全に対立しています。

隣人に対する愛から支配する者は、すべての者に善を欲し、役立ちよりも、したがって他の者に仕えること以上に愛するものは何もありません(他の者に仕えることによって、教会の者であれ、あるいは祖国の者、社会の者、あるいは仲間の市民であれ、他の者の善を欲することと役立ちを果たすことが意味されます)――このことが彼の愛であり、彼の心の快さです。

彼はまた、他の者にまさって高位へ高められれば高められるほど、それだけ喜びます、けれども、それは高位のためではなく、その時、重要な段階で果たすことのできる多くの役立ちのためです。

このような支配が天界にあります。

[2]しかし、自己愛から支配する者は、他の者には何も善を欲せず、自分自身にだけ欲します――役立ちを果たしますが、自分自身の名誉と栄光のためであって、それらが彼にとって唯一の役立ちです――他の者に仕えても、それは自分自身が仕えられ、尊ばれ、支配するという目的のためです――高位を求めるのは、祖国や教会に果たさなくてはならない善のためではなく、卓越や栄光の中に、またここから自分の心の快さの中にいるためです。

[3]支配の愛もまた、世での生活の後、それぞれの者に残っています。隣人に対する愛から支配した者には、天界での支配もまたゆだねられますが、その時、彼らが支配するのではなく、彼らの愛する役立ちが支配します。また、役立ちが支配するとき、主が支配されます。

しかし、世で、自己愛から支配した者は、世での生活の後、地獄にいて、そこの卑しい奴隷です。

私は、世で自己愛から支配した権力者が最も卑しい者の間へと追い払われ、彼らのうちのある者がそこの便所の中にいるのを見ました。

五六五 けれども、世俗愛については、その中にそれほど多くの悪が含まれていないので、それは自己愛ほどには天界的な愛と対立しない愛です。

世俗愛は、どんな術策をもってしても他の者の富を自分のものにしようと欲し、心を富に置くことであり、また世で自分が霊的な愛から、したがって天界から、主から引き返し、連れ去られるままにすることです。

しかし、この愛は多種多様です。

名誉をだけを愛し、その名誉を高めたいために、富への愛があります。富を得るために、名誉と高位への愛があります――いろいろと世で楽しむという役立ちのために、富への愛があります。富だけのための富への愛があり、そのような愛は貪欲です――等々。

その富のための目的のことを、役立ちと呼んでいます。そして目的が、すなわち、役立ちが、その愛自体がどんなものであるか定めています。なぜなら、富のための目的がどのようなものであるかによって、愛はそのようなものであり、残りのものは手段のように愛に仕えるからです。

59 地獄の火とは何か、歯ぎしりとは何か

五六六 みことばの中で、地獄の中にいる者に、永遠の火と歯ぎしりついて言われていますが、それが何か、今までほとんどだれにも知られていません。その理由は、みことばの中にあるそれらについて、その霊的な意味を知らないで、物質的に考えたからです――それゆえ、「火」によって、ある者は物質的な火を、ある者は全般的に拷問を、ある者は良心の呵責を、ある者は悪い者たちに恐れを引き起こすために、ただこのように言われたのだと理解しました――そして「歯ぎしり」によって、ある者はそのようなきしり音を、ある者はこのような歯の打ち合う音が聞こえるときの単なる恐怖感のようなものであると理解しました。

しかし、みことばの霊的な意味を知っている者は、「永遠の火」とは何か、また「歯ぎしり」とは何か知ることができます。なぜなら、みことばはその内部で霊的なものであるので、みことばの中のそれぞれの言葉に、またそれぞれの言葉の意味に、霊的な意味が内在するからです。そして霊的なものは、人間は自然界の中にいて、そこにあるものから考えるので、人間の前には自然的にしか表現されません。

それで、悪い人間が自分の霊に関して死後、やって来て、あるいは霊界の中にいる彼の霊が苦しむ「永遠の火」と「歯ぎしり」とは何か、これから述べます。

五六七 熱には二つの起源があります――一つは主である天界の太陽、もう一つは世の太陽です。

天界の太陽または主からの熱は、霊的な熱であり、その本質は愛です(前の**一二六～一四〇**番参照)。けれども、世の太陽からの熱は、その本質は愛ではなく、霊的なまたは愛の熱の容器として仕えるものです。

愛はその本質で熱であることは、愛から心(animus)が、またここから身体が、その段階と性質にしたがって熱くなることから、このことは人間のもとで冬でも夏でも明らかにすることができます。さらにまた、血が熱くなることもからも明らかにすることができます。

世の太陽から存在する自然的な熱が、容器として霊的な熱に仕えることは、その霊的な熱から霊をかきたてられ、その補助として働く身体の熱から、特に、すべての種類の動物の春と夏の熱から明らかです。その時、その動物たちはその愛の中へ、毎年、戻ります――

[2]自然的な熱がそのことを行なうのではなく、その熱は、霊界から流入する熱を、その動物の身体が熱を受け入れるように適応させるのです。なぜなら、霊界は、原因が結果へ流入するように、自然界へ流入するからです。

自然的な熱がそれらの愛を生み出すと信じる者は、大いに欺かれています。なぜなら、霊界が自然界の中へ流入し、自然界が霊界の中へ流入するのではないからです。すべての愛は、いのちそのものであるので、霊的です――

[3]さらに、霊界の流入なしに何らかのものが自然界に存在すると信じる者もまた欺かれています。なぜなら、霊的なものからしか、自然的なものは存在しないし、存続もしないからです――植物界の対象物もまた、そこからの流入から、その発芽を得ています。春と夏のときに存在する自然的な熱は、ただ種をその生来の形の中で、伸び、開くように、霊界からの流入がそこに原因として働くように、適応させています。

これらのことを示したのは、霊的なものと自然的なものの二つの熱があること、また、霊的な熱は天界の太陽から、自然的な熱は世の太陽から存在し、流入とその後の共同作用が世で目の前に見える結果を示していることが知られるためです。*1

五六八 人間のもとの霊的な熱は、前に言われたように、その本質では愛であるので、彼のいのちの熱です。みことばの中で、この熱は「火」によって意味され、主への愛と隣人に対する愛は「天界の火」によって、自己愛と世俗愛は「地獄の火」によって意味されています。

五六九 地獄の火である愛は、天界の火である愛と同じ起源から、すなわち、天界の太陽である主から存在します。しかし、受け入れる者より、地獄のものになります――なぜなら、霊界からのすべての流入は、受け入れにしたがって、すなわち、流入する形にしたがって変化するからです。〔そのことは〕世の太陽からの熱や光と異なりません――そこからの熱は、木の植えられた所や花壇に流入して植物の生長を生み出し、喜ばしい、ここちよい香りを引き出します。しかし、同じ熱が、廃絶物や死体に流入して腐敗を生み出し、ひどくて、腐った臭いを引き出します――同様に、同じ太陽からの光が、ある対象の中に美しくて快い色を生み出し、他の対象の中に醜くて不快なものを生み出します。

愛である天界の太陽からの熱や光も同様です――熱あるいは愛が、善良な人間や霊のもとにまた天使のもとに流入するように、善の中に流入するとき、彼らの善が実を結びます。しかし、悪い者のもとに流入する

---

*1 自然界の中へ霊界からの流入がある(六〇五三～六〇五八、六一八九～六二一五、六三〇七～六三二七、六四六六～六四九五、六五九八～六六二六番)。
動物のいのちの中へもまた流入がある(五八五〇番)。
植物界の対象の中へもまた流入がある(三六四八番)。
その流入は神的秩序にしたがって活動する絶え間のない努力である(六二一一番末尾)。

とき、反対の結果が生じます。なぜなら、悪は善を窒息させるか、あるいはそれを歪(ゆが)めるからです――同じく、天界の光は、善の真理の中に流入するとき、知性と知恵を与えます。けれども、悪からの虚偽の中に流入するとき、そこでいろいろな種類の狂気と幻想に変わります。

このように、どこでもその受け入れにしたがっています。

五七〇 地獄の火は、自己愛と世俗愛であるので、その愛からのものであるすべての欲望もそのようなものです。欲望はその絶え間のない愛であるので、人間はこれを絶えず熱望するからです。そしてまた快さでもあります、なぜなら、人間は愛するかまたは欲するものを得るとき、快さを覚えるからです。この源泉以外に、人間の心(cor)の快さはありません。

それで、地獄の火は、それらの二つの愛を起源として湧き出るかのような欲望と快さです。

それらの悪は、他の者への軽蔑、自分に好意をもたない者に対する反目と敵意であり、ねたみ・憎しみ・復讐、これらからの残忍と残酷です。また神性に関しては、その否定であり、ここから教会のものである聖なるものへの軽蔑・あざけり・冒涜であり、それらは、人間が霊になるとき、それらに対する怒りと憎しみに変わります(前の**五六二**番参照)。

また、これらの悪は絶えず、敵とする者を滅ぼし、殺害しようとし、その者への憎しみと復讐に燃えます。それゆえ、彼らのいのちの快さは滅ぼし、殺害することを欲することです。このことが可能でないなら、危害を加え、傷つけ、残酷に振る舞うことを欲します。

[2]これらが、みことばの中で悪い者と地獄について述べられているところで「火」によって意味されることであり、その確証のために、みことばからいくらかの箇所をここに引用します――

だれもが偽善者で悪意のある者であり、すべての口が愚かなことを話している。……なぜなら、悪意が火のように燃え、いばらとおどろが食い尽くし、森の茂みを燃やし、煙の高まりとなってのぼる。……民は火の食べ物となり、男はその兄弟を赦さない(イザヤ九・一七―一九)。

わたしは天と地にしるしを与える。それは血、火、煙の柱である。太陽は暗やみに変わる(ヨエル二・三〇、三一)。

地は燃えるピッチになる。夜も昼も消されず、永遠に、その煙はのぼる(イザヤ三四・九、一〇)。

見よ……炉のように燃える日が来る。すべて高ぶる者、またすべて悪意を行なう者は切り株となる。来ようとしている日は彼らを燃やす(マラキ四・一)。

バビロンは……悪魔の住まいとなった。……その焼かれる煙を見て、叫んだ。……煙は永久にのぼる(黙示録一八・二、一八、一九・三)。

深淵の穴を開いた、すると穴から大きな炉の煙のような煙があがり、太陽と空気は穴の煙から暗くなった(黙示録九・二)。

馬の口から火と煙と硫黄が出た。これらにより……火と煙と硫黄により、人間の三分の一が殺された(黙示録九・一七、一八)。

獣を崇拝する者は……神の怒りの杯に混ざりもののないぶどう酒の混ざった神の怒りのぶどう酒を飲む。そして火と硫黄で苦しめられる(黙示録一四・九、一〇)。

第四の天使が自分の鉢を太陽に注いだ。太陽に火による熱で人間を焼くことが与えられた。そこで人間は大きな熱で焼かれた（〔黙示録〕一六・八、九）。

火と硫黄で燃える池へ投げ込まれた（黙示録一九・二〇、二〇・一四、一五、二一・八）。

よい実を結ばない木は、すべて切り倒され、火の中に投げ込まれます（マタイ三・一〇、ルカ三・九）。

人の子はご自分の御使いたちを遣わします。彼らはその方の国から、すべてのつまずきとなるもの、それと不正を行なう者たちを集めます。そして彼らを火の炉の中に送ります（マタイ一三・四一、四二、五〇）。

王は左の者たちに言う。「私から離れよ、呪われた者ども。悪魔とその使いたちに用意された永遠の火へ入れ」（マタイ二五・四一）。

永遠の火の中へ……ゲヘンナの火の中へ送られる。そこでは、彼らの〔うじ〕虫は死なず、火は消えない（マタイ一八・八、九、マルコ九・四三―四九）。

地獄の中の富んでいる者はアブラハムに、「炎の中で苦しめられている」と言った（ルカ一六・二四）。

これらの中で、また他の多くの箇所で、「火」によって自己愛または世俗愛のものである欲望が意味され、そこからの「煙」によって悪からの虚偽が意味されています。

五七一　自己愛と世俗愛からのものである悪を行なう欲望が、「地獄の火」によって意味され、このような欲望は地獄の中のすべての者にあるので（これまでの章参照）、それゆえ、地獄が開かれるとき、火災でよくあるような、煙と一緒になった火のようなものもまた見られます。自己愛が支配する地獄からは濃い火が、

世俗愛が支配する地獄からは炎が見られます。

けれども、閉ざされるとき、そこに火は見えませんが、代わってそこに、煙から濃くなった暗いようなものが見えます――それでも、火はその内部で燃えていることが、そこから出てくる熱からわかります。その熱は、火災の後に燃えているような、あるところでは熱くなっている炉からのような、また他のところでは浴室の温かさからのようなものとなっています。それでもその熱さが人間のものに流入するとき、欲望をかきたて、悪い者のもとでは憎しみと復讐を、病人のもとでは狂気をかきたてます。

前述の愛の中にいる者には、自分の霊に関して、さらにまた身体の中で生きたとき、それらの地獄に結び付けられているので、このような火あるいは熱があります。

しかし、地獄にいる者は火の中にいないで、火は外観であることを知らなくてはなりません。そこの彼らは何かが燃えることを感じないで、ただ以前、世にあったような熱を感じるだけであるからです。

火が見られるのは、対応からです。なぜなら、愛は火に対応するからです――霊界の中で見られるすべてのものは、対応するものにしたがって見られます。

五七二　その地獄の火または熱は、天界から熱が流入するとき、きびしい寒さに変わり、その時、そこにいる者は氷のように冷たく感じる熱病に襲われたかのように震え、そしてまた内部で苦しめられることを理解しておくべきです。このことの理由は、彼らが完全に神性と対立していて、神的な愛である天界の熱が自己愛である地獄の熱を消し、それとともに彼らのいのちの火を消すからです。そこからこのような寒さとここからの身震い、そしてまた苦痛があります。

その時、そこには暗黒もまた生じ、そこから愚かさと心の不明瞭があります。
しかし、このことが起こるのはまれであり、そこに攻撃が過度に増大し、鎮(しず)められるときだけです。

五七三　地獄の火によって自己愛から流れ出る悪を行なおうとするすべての欲望が意味されるので、ここから同じ火によって地獄の中にあるような拷問もまた意味されます――なぜなら、その愛からの欲望は、自分を尊敬し、崇め、礼拝しない他の者を傷つけようとする欲望であるからです。ここからの怒りを、また怒りから憎しみと復讐を得れば得るほど、それだけその欲望は彼らに対して残酷に振る舞うものとなります――このような欲望が社会の中のそれぞれの者に内在していて、そこに法律に対する恐れそして名声・名誉・利益・いのちを奪われることに対する外なる束縛が抑制されない時、それぞれの者は自分自身の悪から他の者へ突進し、欲するかぎり、さらに支配し、他の者を自分の支配に服従させます。服従しない者に対しては、快さから残酷に振る舞います。

この快さは、同じような段階の支配する快さと完全に結合しています、傷つけようとする快さには、前に言われたように、その愛の悪のものである反目・ねたみ・憎しみと復讐が内在するからです。

すべての地獄はこのような社会です。それゆえ、そこのそれぞれの者は心で他の者に対する憎しみを抱き、憎しみからできるかぎりの残酷の中へと突入します。

これらの残酷とそこからの拷問もまた地獄の火によって意味されます。なぜなら、欲望の結果であるからです。

五七四　前に、悪霊は自分自身を自発的に地獄へ投げ込むことを示しました(**五四八**番)――それゆえ、地獄にこのような拷問があるにもかかわらず、どこからそのことが起こるかもまた簡単に述べておきます。

どんな地獄からも欲望のスフェアが発散されていて、地獄の者はその欲望の中にいます。

このスフェアが似た欲望の中にいる者により知覚されるとき、彼は心(cor)から働きかけられ、快さに満たされます。なぜなら、欲望とその快さは一つとなっているからです。ある者が望むものは、彼にとって快いものであるからです――ここから、霊は自分からそこへ向きを変え、心(cor)の快さからそこへ行こうと望みます。なぜなら、そこにこのような拷問があることを、まだ知らず、知っていても、それでもそこへ行こうと望むからです。霊界では、だれも自分の欲望に抵抗することができないからです。欲望は彼の愛のものであり、愛は彼の意志のものであり、意志は彼の性質のものであり、だれもがそこではその性質から行動するからです。

[2]そこで霊は、自発的にまたは自分自身の自由から自分の地獄へ到着し、そして入ります。その時、最初は友たちの間にやって来たように信じていて、親しげに受け入れられます。しかし、このことはただ数時間だけしか続きません。その間に、〔その霊に〕どのような欺きがあり、ここからどのような値打ちがあるか調べられます――調べられてから、彼を攻撃することが始まり、このことは、いろいろな方法で、連続的にさらに鋭く、さらに激しくと、地獄のさらに内部へ、さらに深くへ導くことによって行なわれます――なぜなら、地獄ではさらに内部へ、またさらに深くへ行くほどますます、霊はさらに悪質であるからです。

[3]攻撃の後、彼に対して罰によって残酷に振る舞うことが始まり、このことは奴隷とされるときまで続きます。

しかし、そこではだれもが最大の者であること欲し、他の者に対して憎しみに燃えるので、そこには絶えず反乱の動きが存在し、ここから新しい攻撃があります。このようにある場面は他の場面に変わります。それゆえ、奴隷とされた者は、ある新しい悪魔が他の者を服従させるために、その働きを実行するようにと解放されます。その時、服従せず、指図に従わない者は、再びいろいろな方法で拷問され、絶えずこうしたことが行なわれます。

このような拷問が地獄の火と呼ばれる地獄の拷問です。

五七五 けれども、歯ぎしりは、虚偽の間の、したがって、虚偽の中にいる者の間の、絶え間のない論争と闘争であり、他の者への軽蔑・反目・嘲笑・あざけり・冒涜ともまた結合していて、それらもまたいろいろな種類の引き裂きとなって激しく出てきます。だれもが自分自身の虚偽を真理と呼んで、そのために戦うからです。

これらの論争と闘争は、その地獄の外で歯ぎしりのように聞こえます――そしてまた真理が天界からそこに流入するとき歯ぎしりに変化します。

それらの地獄の中に、自然を認め、神性を否定したすべての者が、さらに深いところには、そのことを確信した者がいます。

彼らは、天界からの光を何ら受け入れることができず、ここから自分自身の内部に何も見ることができないので、それゆえ、その大部分の者は身体からの感覚的な者であり、目で見て、手で触れるもの以外に何も信じません――ここから、感覚の欺きのすべてが彼らにとって真理であり、ここからもまた論争します。

彼らの論争が歯ぎしりのように聞こえるのはこのことからです。なぜなら、霊界の中のすべての虚偽はギーギーときしり、歯は自然界の中の最外部のものに、そしてまた人間のもとの身体の感覚的なものである最外部のものに対応するからです[*2](地獄に歯ぎしりがあることは、マタイ八・一二、一三・四二、五〇、二二・一三、二四・五一、二五・三〇。ルカ一三・二八参照)。

＊2 歯の対応について(五五六五～五五六八番)。
感覚的なだけであり、霊的な光の何らかのものをほとんど持たない者は歯に対応する(五五六五番)。
みことばの中の「歯」は、感覚による感知力を意味し、それは人間のいのちの最外部のものである(九〇五二、九〇六二番)。
来世で、歯ぎしりは、〝自然がすべてであり、神性は無である〟と信じる者からのものである(五五六八番)。